

旭川文学資料友の会

友の会通信 第28号

発行・NPO法人 旭川文学資料友の会
 〒070-0044
 旭川市常磐公園 旭川市常磐館内
 電話 0166-22-3334
 印刷・株式会社あいわプリント

「文学資料館って何?」

旭川文学資料館館長

三原 一仁

文書館・文学館・記念館・博物館・資料館・史料館など、文字文化に関する施設は世にいろいろあります。私としては「文楽館」(ぶんがくかん)というのがあってもよさそうに思うのですが、これは寡聞にして知りません。旭川市内には旭川文学資料館のほかに、三浦綾子記念文学館、井上靖記念館、西川徹郎文学館があります。

文学館や記念館という名前の施設は各地にあります。全国には、郷土文学館や文学歴史館というのがありますが、意外にも「文学資料館」と称するのはきわめて少ないようです。作家個人や文学の各分野を対象にした施設

は、それぞれに専門性も高く深く、来訪者も多い。陰に陽にファンによるサポートもあって魅力的な企画展も催されます。

旭川文学資料館を運営しているNPO法人旭川文学資料友の会は、発足当時は旭川文学資料研究会という名前でした。文学友の会でも文学研究会でもなく「資料」という言葉を入れたところに大切な意味があります。

名は体を表すといえます。
 二〇一〇年のNPO法人設立趣意書では危機感をもって「ともすれば散逸しがちな作品群と資料」といってその「保存」を訴え、その危機感を市井の私たちが共有するために「展示、紹介してゆく」とあります。そこからは、この文学資料館の第一義的な使命が「収集と保存」にあることがわかります。それぞれの作家の専門的な文学館や記念館とは、もともととその趣旨を異にしているといえましょう。

実際そういう性格上、そのような館で催される文学展や記念イベントのように多くの人々の関心を集められるようなものを企画す

ることはなかなか難しいのです。小声で言うならば、そういう企画をすることが本来的な役割ではないこともわかっていただきたい。いやそれ以前に、この資料館の存在そのものを知っていただきたいというのが偽らざる正直な思いです。それほどに旭川文学資料館は、残念ながらまだ旭川市民に知られていないと言いますね。

裾野が広ければ山は高い。つまり山高ければすなわち緑深く裾野は広がり沢も沃野も多岐にわたるでありましょう。市井の文学資料館である旭川文学資料館の役割は、裾野に広がる湖沼や原野の案内所のようなものでしょうか。

井上靖記念館をはじめ市内や全国の文学館で企画される「文学展」などには、これまで所蔵資料の貸し出しや情報提供などで協力してきました。その実績のうえに、旭川文学資料館は、地方にありながら、日本文学の調査研究に欠くことのできない施設として、今後全国的に活用される存在となることでしょう。



第二十四回旭川文学資料展

「旭川ゆかりの俳人

藤田旭山展」を終えて

(会期 二〇二二年十一月二日)

二〇二二年三月二十六日)

沓澤 章 俊

今回の資料展では、藤田旭山の句集、直筆原稿、色紙短冊、使用していた毛筆、硯、万年筆、主宰した俳誌「俳海」、国語教師として勤務していた旭川工業高校の文芸誌、師と仰いだ室積徂春の書、写真、徂春主宰の俳誌「ゆく春」、徂春が「旭光荘」と名付けた藤田旭山邸の模型(間藤悠史氏作成)、そして徂春が揮毫した「旭光荘」の書、旭山の妻 藤田月女の句集等々、総計約三三〇点を展示しました。その中には、さらに貴重なものとして、「俳海」の題字を揮毫した志賀直哉の写真、葉書。旭川を代表する画家佐藤進やその御子息佐藤道雄氏や同誌同人でもあった杉本勝義氏らが描いた「俳海」掲載の原画。山口誓子からの書簡。三浦綾子(堀田綾子)も参加した回覧句集。旭光荘前での旭山と三浦夫妻の写真、などもありました。

今回の展示で自分自身勉強になったことの一つは、藤田旭山の「旭山」という俳号は、当時旭川で発行されていた俳誌「雪舟」同人で、旭山が俳句の手ほどきを受けていた島村蕪吟から名付けられたということ。

『旭川文芸百年史』(二〇〇八年・旭川文化団体協議会発行)収載の「旭川俳句百年史」(館川京二執筆)を参考に記せば、俳誌「雪舟」は大正十二年(大正十一年という説もある)、旭川の名刹「慶誠寺」二代目住職で「ホトトギス」同人だった石田雨圃子が創刊に参画。この「雪舟」に蕪吟と共に藤田旭山も名を連ねています。

そしてもう一つ。幾分か個人的な感想も交えて。次の文は「俳海」藤田旭山追悼号(平成三年七月)からの一部引用です。

「すると又、「ふえーえん、ぺつぱあ。」

と言っている。そして困っている私の顔を見て、大きく息を吸い込み、一こと一こと区切って、はつきりと言った。

「せい・れん・けつ・ぱく!。」

「せいれんけつぱく?。」

と大きな声でくり返すと、「いかにも。」というふう満足そうに笑みを広げて、まるで全身の力をふりしぼった後のような息を吐いて、静かに目をつむった。

「清廉潔白」

それが父の最後の言葉となった。

父藤田旭山を看取った三女、坂井京子(俳号 坂井今日子)さんの「父の手」という文章の一部です(この文章も展示しました)。

坂井さんは、当旭川文学資料館の運営母体である旭川文学資料友の会(設立当初は旭川文学資料研究会)の初期の頃からのメンバーで理事も務められました。数年前から入院生活を余儀なくされ、今回の資料展をじかに観

ていたことはできませんでしたが、引き延ばした展示室の写真を京子さんの夫 坂井恒俊さんがリポートで見せたところ、ゆっくりとうなずかれたと聞いています。旭山の作風や親族の方々から教えていただいた旭山の人となりと京子さんの面影が二重写しとなり、まだ盛夏でもないのに、生前いただいたロシアひまわりの種がとて大きく育ったその風景が背景となつて、心にやきついてきます。

会期中、藤田家の方々、旭川工業高校で旭山に教わった方々、俳句関係、市民の方々にご覧いただき感謝いたします。

最後に、今回の資料展のため多くの資料をお貸しいただいた藤田尚久様、藤田佐智子様、坂井恒俊様、故坂井京子様、あらためてお礼申し上げます。



「俳海」創刊頃の藤田旭山(右)と藤田旭山展風景



第二十四回旭川文学資料展 藤田旭山展を観覧して

藤田尚久

この度、旭川文学資料館で「藤田旭山展」が企画開催されましたことは、大変有難く喜ばしく思っています。父旭山も天国で俳友と喜んでいることと思います。

関係者の方々に深甚の感謝を申し上げます。準備段階で関係者の訪問を受けました。旭山没後三十年になりますが、俳句関連の遺品はほとんど未整理のままでした。あちこちを探したところ、思いがけないものや、懐かしいものが出てきました。雅号「旭山」の命名を記す当時の師 島村蕪吟氏の直筆の漢文の書も見つかり感動しました。

展示会がいよいよ開会された日、早速向きました。入場して行き成り壁一面の「層雲峡絵巻」に出合い、目を見張りました。層雲峡を詠んだ数々の俳句が鏤められています。バックの景色は、杉本勝義画伯によって画かれています。半世紀以上も押し入れの奥に眠っていた逸物です。

恩師室積徂春のコーナーは、感慨深いものでした。師が「旭光荘」と名付けたわが家の二階の客間は、師が来旭した折に逗留した部屋で、天袋や襖には、師の筆跡が残っています。当時子供達には特別の部屋でした。また

旭山が生涯続けた月例会も子供達にとって特別の日でした。静かな作句と選句の時間、やがて賑やかな披講の時間があり、私達子供は茶の間でお菓子を頂戴しながら、静かにしていました。家も庭も優雅な時間が流れていたことなどが、ありありと蘇って来ました。

晩年旭山は、俳誌「俳海」を主宰、創刊致しました。会場には旭山が精魂こめて作った二四〇冊の「俳海」が積まれています。いつも正座して文机に向っていた父の姿が目につかびました。毎月、誌の発行、そして句会と月例行事が一段落すると、父は趣味の囲碁を友人と楽しんだり、お気に入りの歌舞伎の台詞を唸ったりして、二、三日のんびりと過ごし、再び「俳海」の編集に打ち込んでいました。

会場に並ぶ短冊や色紙の俳句は、旭山自慢の傑作です。私は見覚えのある五七五を口遊み、記憶にない句に出合ったりしながら、改めて長く濃い父の俳句人生を回想しました。

旭山と偕老同穴の俳句人生を共にした妻松枝(雅号月女)のコーナーには、心が和みました。月女歴代の俳句を旭山が自ら筆で記した和綴じの「月女俳句集」の数冊は、月女の写真と共になつかしく、墨の香りも感じました。

しばし遠ざかっていた俳句の雰囲気私の心に蘇って来て、時勢が少し戻ったような明るい気持ちになりました。改めて御礼申し上げます。



島村蕪吟直筆の書



藤田月女のコーナー



「層雲峡絵巻」

次年度の企画展等予定

◇二〇二二年四月十二日～六月三〇日

「日本漫画家協会賞を受賞!!」

旭川ゆかりの漫画家

山村輝夫展」

山村輝夫さん
2009年
北海道十勝にて

山村輝夫さん(一九四二～二〇二〇)は旭川生れ。旭川北高、武蔵野美術大学卒業。東京にて漫画家の杉浦幸雄氏に師事し漫画家の道をめざすも、家業の酒販業を継ぐため旭川に帰る。故郷の自然、歴史、人情などに触れ自分の世界を見出し再び筆をとります。

一九七七年、漫画私本『北に住みて想う日々あれば』で、第六回日本漫画家協会賞の大賞を受賞。この時の優秀賞は、みつはしちかこ『小さな恋のものがたり』。特別賞は、ちばてつや『のたり松太郎』でした。

一九七八年から約五年間、月刊誌「月刊ダシ」(北海道新聞社刊)の表紙絵を描き、一九九〇年、画文集『遠い日の村のうた』で第三十九回小学館絵画賞を受賞。

その他絵本漫画作品に、開拓絵物語『原野に星は光る』、漫画私本『オサラツペ山老骨記』、『キリちゃん』、『天と地の家族』などがあります。

ちなみに、日本漫画家協会賞は、日本漫画家協会公式サイトによれば、〃〃漫画界の向

上発展を図る目的のもと、優秀作品を顕彰するため、一九七二年に創設。プロ・アマ・国籍・年齢・性別等一切を問わずあらゆるジャンルのさまざまな手法を使って創作され発表された漫画作品を対象とすることで、複数の選考委員による厳正な審査により、その年の最も優れた作品が選出される”とあり、大賞・優秀賞・特別賞部門に加え、一九九〇年から文部大臣賞(現文部科学大臣賞)を設立し現在に至る、とのこと。歴代受賞者には、藤子不二雄、手塚治虫、松本零士、横山隆一、池田理代子、石ノ森章太郎、やなせたかし、長谷川町子、水木しげる、赤塚不二夫、さいとう・たかお、里中満智子、つげ義春、永井豪、さくらももこ、モンキー・パンチ等々、お馴染みの漫画家がズラリと名を連ね、二〇二一年度は、あの『鬼滅の刃』の吾峠呼世晴が大賞を受賞しています。

当企画展では、山村輝夫さんの著作群、「月刊ダシ」の表紙絵、絵画などを展示し、その人となりも紹介したいとおもっています。新たに設けたミニ展示室での企画展となります。

◇二〇二二年七月六日～十月二十二日

第二十五回旭川文学資料展

「21世紀文学 旭川のきらめく星たち」

次年度メインの資料展です。

旭川文学資料館の常設展示室では、現在活躍中の次の文学者たちを紹介しています。浮穴みみ、岡和田晃、奥山寿、加藤千恵、小路幸也、鳥見真生、中家菜津子、永江朗、春見朔子、藤井邦夫、柳澤美晴(五十音順、敬称略)。

今回は、さらに幾人かを加えて、現在進行形で文学にたずさわる旭川関係の方々を網羅的に紹介し、その方々の人と作品を、是非とも広く市民の方々に知っていただきたい! という思いを込めての企画です。

◇二〇二二年十一月一日～

二〇二三年三月三十一日

生誕一三〇周年記念「旭川の芥川龍之介」

— 死の二ヶ月前、彼は旭川にいた!

二〇二二年は、芥川龍之介(一八九二～一九二七)の生誕一三〇周年となります。

昭和二年(一九二七年)、芥川は、里見淳と共に改造社企画の講演旅行を断行し、旭川の錦座(三条通十五丁目)でも講演を行いました。そのときの旭川の印象記や、当時の新聞記事などを展示する予定です。(ミニ展示室使用)

◇二〇二三年二月、三月

「出張展示」の実施

旭川生涯学習フェア「まなびピアあさひかわ」への参加や、メガセンタートライアル旭川店、神楽市民交流センター(予定)などで出張展示を行います。

■ミニ展示室の活用

新たに、ミニ展示室のスペースを設けました。ミニ展示室を開放して、学校文芸部や、絵画、写真、漫画、演劇等、各サークルの方々の発表の場としていただきたいと思います。

追悼

亡くなられた六名の方々の
ご逝去にあたり、永年のお
力添えに感謝しご冥福をお
祈り申し上げます。

富田正一さんの思い出

出雲 章子

散逸の進む旭川ゆかりの文学者達の古い著作や資料を収集して展示する「文学資料館」を目指して市民有志や関係者に働きかけてくださった富田さんが亡くなった。館長時代はこまめに顔を出して下さり、北海道内の文学者に働きかけて、今では手に入らない古い資料を集めて下さったり、展示や保存方法など指導して頂いた。行動力と気配りで旭川で開催された「北海道詩人協会」総会の時は遠方の方達のために駅への出迎えから見送りまで細かく配置され私達は唯 後から付いていただけだ。コロナ禍のなか体調が思わしくないなかで詩人クラブのこと文学資料室のことなどを掛付け 目を配って下さった。添え書きや添削の詰まった資料を見るたび解らないところを聞き出しなくなる。もつともつと聞いておきたいことがあったのにと後悔しています。資料館に行くたびに富田さんのマンションを見上げてしまう。誰も住んでいない部屋なのに、ペランダから常磐公園と資料館を見守っていてくれる姿を求めてしまう。「旭川詩人クラブ」の「詩めぐる 旭川 終刊号」を見て頂けなかったことと『青春のプロムナード』の出版祝いをしてあげられなかったことが残念でなりません。富田さん 六十有余年思い出をたくさんありがとうございました。

文学資料館と夫

佐藤 蓉子

バスが旭橋を渡ると右に文学資料館が見えてきます。今は亡き夫を車で送り迎えた過ぎた日があつたかしく思い出します。夫と資料館の出合いは、啓明小学校の教室を借りて資料整理作業が始まりと思います。文学資料館設立に友の会の活動は困難を極めたそうですが、皆さんの創意と発想で次々と解決、そして即決行動力に夫は驚き、いつも感嘆していました。そして八年に亘る皆さんの熱い思いと努力でオープンした文学資料館。一番喜んだのは夫だったかと思えます。

戦後、本はおろか一枚の便箋にも不自由した少年時代の夫でした。資料館で蔵書の山に囲まれ、本がご飯より好きという夫には倅せな作業だったでしょう。或る日は、「凄い本をみつけた」と日頃、口の重い夫がとびつきりの笑顔で言うのです。めったに手に入らない本だそうです。文学資料館がオープンして、十三年。夫の資料館通いは何よりの生き甲斐で杖にすがる体になっても続きました。小さなおむすび一つ持つて出かけます。手作りのお惣菜やおやつのお裾分けで、ボランティアさんとの和やかなお昼ご飯。

夫の晩年は病気がかりでいいことがないと思つていましたが、真つ直ぐ生きた夫に神さまの贈り物でしようか、生涯の終わりに、念願の文学資料館で、心の通う友の会の方々と至福の日々、夫の人生は矢張り、いい人生だったと私は思うのです。長い歲月、支えて下さったボランティアの皆さんに心からの感謝と共に。

「井内さんから教わったこと」

軽部 望

井内治彌さんの存在を知ったのは故川島洋一先生が「保存の会」を始めてからのことだった。建築界の端くれのこの目には上川倉庫群の保存再生を実現させた雲の上の存在としての井内さん像が映り、まさか先生の他界後に接点をもつことになろうとは夢にも思わなかった。誰に対しても同じ態度で歯に衣着せぬ物言いの先生でさえも東高の先輩にあたる井内さんと会う時は毎回緊張していたと奥様の訓子さんから明かされ、はたして自分ごとがお会いする立場になってよいものか？とたじろいだだが、実際に接した井内さんはとても穏やかで包容力のある優しい人という第一印象に安堵した。発する言葉のひとつひとつに熱い情熱を感じ、これまでに出会ったことのない高い人間性に触れたことで尊敬に値する人物だとすぐに直感した。故川島洋一先生も同様、何かを成し遂げる人物はみんな情熱家なのだ知った瞬間でもあった。「建物は生きていると言った川島さんの言葉にすつかり意気投合した」と語っていた井内さんは役目を失った自社の倉庫群に「この建物たちも100年間我々と一緒に働いてきた仲間。もつと働きたいだろう」と慈しみの眼差しを向け、その後何年も模索しながら再生という困難な道を選んだ。その情熱が蔵囲夢という形になってふるさと旭川にすばらしい財産を遺してくれた。文化と歴史の大切さ、情熱を燃やすことの大切さを教えてくれた恩人井内治彌さんに心からの感謝を捧げたい。

当会顧問 富田 正一氏

令和三年四月七日 御逝去

当会元副会長 佐藤比左良氏

令和三年四月十三日 御逝去

当会顧問 井内 治彌氏

令和三年十二月二日 御逝去

雪の雄大「正」の雪纏い他生へ

西川良子
水下寿代

深谷雄大 札幌にて入院中 肺癌により、令和三年十二月二十日逝去 享年八十七歳
訃報を受けた西川は直ちに橋本主宰に連絡。主宰は札幌在住の五十嵐秀彦と追悼の打合せ、一月例会句会にて黙祷を捧げた。

生涯の師と仰ぐ石原八束の『秋』創刊に参画、昭和五十三年 主宰誌『雪華』創刊。

「俳句は生きる確め」との理念を生涯貫いた。神経系統疾患治療中、運転していて他車の激突事故に遭遇。満身創痍の身ながら、多岐に渡り活動。自らの句集等著書を多数刊行。会員の句集等出版には特に力を注いだ。自作の基底は「負」なるものに立ち向かう生き方を確立。雪華創刊二十周年記念に会員は北海道護国神社境内に「深谷雄大句碑」を建立した。

〈日の出づる国のまほろば雪の川 深谷雄大〉

雄大の業績に各方面からの受賞多数。

雄大は長年「旭川市に文学資料館を」の思いがあり、東 延江、深谷雄大他の五名により、旭川市教育委員会へ趣意書を提出。現在の旭川文学資料友の会の源となった。多くの人達、団体からの資料、書籍、器具等の寄贈が基となった。雄大も膨大な寄贈をした。朝鮮引揚後、口を糊する時代の母の苦勞を句会で、「母を思い出しましてね」と涙を流した。雄大の纏綿たる情。雪華の事績は本誌参照を。

雄大の句に「雪」が多く詠まれ、〈雪の雄大〉と広く俳句界に知られるようになった。
〈今生の負に立ち向ふ雪無尽 雄大〉

平成三十年六月 橋本喜夫を主宰として委譲。

当会元顧問 深谷 雄大氏

令和三年十二月二十日 御逝去

坂井京子さんのこと

立岩 恵子

入院されて寝たきりと伺ってもコロナ禍で訪ねる事もできずに年を越し、一月五日にとの訃報がとび込む。道新の「文芸ひろば」に今日京子さんの句が載るたび安堵してましたのに。最後の掲載は二月四日でした。

掛軸の落款薄き冬座敷 坂井今日子

京子さんは当会の発起人のお一人。生粋のポラントニア精神でお体弱い素振りなど少しも見せず、いつも明るく優しく、時折お茶目なかけ声ひと声ご発声。おしゃれでモダン、同年代の私には憧れの女性でした。香蘭女子高等学校で国語の先生をされていたとの事。

奇しくも今、企画展は「藤田旭山展」で、京子さんのお父様です。お母様は「月女」。藤田邸宅の模型を見ていますと、そこは豪華な顔触れの文人たちの交流の場で、三男三女の末っ子、皆さんから大事に大事に可愛がられていた京子お嬢さんが、見えてきます。

旭山主宰「俳海」お父様亡き後は、ご縁の深かつた後藤軒太郎主宰の「舷燈」に所属。二〇〇七年「舷燈」終刊号より 坂井今日子

雪虫や墓碑のごとくに父の句碑
幼な児の手よりこぼるる木の実かな
草の息地の息塞ぎ今朝の霜

連峰をたづさへ旭岳眠る

豊かな愛、深いまなざし、真摯な言の葉、心にしみます。ポラントニアお昼時の、京子さんの声や表情も、いつまでも私たちを魅了し続けるでしょう。手作りの煮豆や玉子焼きも。
また、お会いするまで 合掌。

当会元理事 坂井 京子氏

令和四年一月五日 御逝去

西勝先生

鎌田 章子

二〇二二年一月三十日、かぎろひ詩社の編集・発行人であり、旭川歌人クラブ会長の西勝洋一氏が急逝されました。入院中で、急変する可能性の宣告もされていたようですが、歌を作り、記事の依頼を誰彼に送るなどバリバリ活動しておられたので亡くなられたとの報はとてもショックでした。最後まで『歌人』を全うされた八十年の人生でした。

病氣療養中の木村隆氏より平成十四年十一月・平成十五年一月合本号から『かぎろひ』編集人を引き継ぎ、平成三十年、石山宗晏発行人の逝去により編集・発行人及び旭川歌人クラブの会長の任に当たられました。

歌会では新人には丁寧優しく、慣れてくるとどこが問題かを指摘する厳しさを見せ、長く続けてきた「歌集を読む会」では意見を十分発言させてそれぞれの読みを深めさせ、時に資料を提示、教師らしい指導にみな心酔したのです。

葬儀の折の会場を埋め尽くす花輪、花輪。短歌関係以外に、民生委員などの福祉関係、旭川刑務所での奉仕など、殆ど語ることがなかったポラントニア活動を示すたくさんの花輪に、氏の多彩な活動を知らされました。

今年の新年歌会に出された歌が
降る雪に白いマンシオン霞ゆくおおつごもりの団欒あれよ

マンシヨンの住人に向けた歌のようですが、作者が病室で送った大晦日を思うと、胸に迫ってくる一首です。
合掌

当会副会長 西勝 洋一氏

令和四年一月三十日 御逝去

会員のみなさんのページ

地の涯の雪掻きに来た漢おとこ

丹下 美井

氷原帯は昭和二十四年に細谷源二先生の手により「働く者の俳句」として創刊された。その後氷原帯の座標は「抛って立つ風土と人間を詠む」になった。令和元年に、会員や幹部の高齢化の為に泣く泣く氷原帯を終刊する事になった。だが七十余年の歴史を持つ氷原帯からは個性豊かな俳人を大勢輩出した。これは源二先生を初め、川端麟太、鈴木光彦、谷口重岐夫、山陰 進の各先生方の指導の賜物である。加えて氷原帯の参与、編集、同人、支社員が一丸となっていた事も上げられる。

なお、氷原帯の異色な人と言えば、佐藤寛水氏が上げられる。この方は小学生のころにお兄さんから俳句の手ほどきを受け、職業軍人になっていた時も、戦場に居たときも俳句を作り続けていたそうです。終戦となり佐藤寛水氏は生まれ故郷に戻ったのですが、国賊と言われ公職はおろかまともな職に付けず、やむをえず闇屋になり行商人になったと氷原帯叢書の句集『愛』に書いておられました。俳句は故郷に帰ってから作句していましたが、其の内に懸賞俳句に発表された細谷源二先生の句「地の涯に倅せありと来しが雪」と

言う句に出会い傾倒してしまったとの事であります。その後、源二先生と文通をする様になったとの事です。そして北方俳句人を送つてもらい、それ迄やっていた伝統俳句をかなぐり捨てて、その当時、新興俳句人と言われた源二先生に会いたくなり、行商をしながら北海道に渡り、それが切っ掛けで釧路に根を生やしてしまつた俳人です。今時分こんな方など居ない。しかも九十八歳の高齢にかかわらず氷原帯の最高企画同人として後輩を指導しておりましたが、残念ながら平成二十六年に多くの俳人に見送られ旅立ちました。

本当に残念に思います。なお、此の方こそ眞の俳人だと私は思いました。

平成二十三年氷原帯九月号の作品から

地の涯に雪掻きに来し漢かな 寛水

清貧が好きでまつわる秋の風 寛水

初めました

川原 潤

春間近な今日この頃、三寒四温を繰り返し段々と春めいていくのでしようね。

初めまして、川原 潤(六十六歳)と申します。市内中学校で定年退職、その後五年間の再任用。教育機関のお蔭で沢山の良い思い出と充実した年月を送ることが出来ました。昨年三月で教育現場を退きました。教科担当は「美術科」でしたので、好きな美術を公私

共々させていただき、趣味と仕事が一致していることは幸運でした。

文学資料友の会との出会いは、東延江さんのお誘いで、文学資料館の展示のお手伝いをして頂けないか、ということからでした。元々美術関係で展示・飾り付け作業は体に染み付いていましたので、何のためらいもなく参加させてもらいました。段々と展示会場が完成していくのは楽しいものでした。その時知り合つた、沓澤さん・黒田さんと仲良くさせて頂き人と人の繋がりも広がりました。ありがとうございます。

東さんとの会話の中で驚いたのは、私の父(故 良昌)が文学資料館と接点があることでした。父は詩が好きで同人誌に投稿したり文学賞に応募したりしていましたので、東さんが資料の中から探して頂き、詩は見つかりませんでした。父の写っている写真を見つけてくれ、亡き父との思わぬ再会に嬉しくなりました。何か運命のつながりを感じたときでした。東さん、お忙しいのに時間を割いて頂きありがとうございます。

自分は、父とは趣味が異なり全然文学的知識・素養はありませんが、文学資料友の会の一員として一助になればと思っております。これからもボランティア精神で皆さんと活動を共にしていきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

資料館だより

受贈資料(敬称略)

二〇二二・七〜二〇二二・三

・長田 典子 「詩と思想」二〇二二年七月号
「特集 小熊秀雄」

・旭川歴史市民劇実行委員会事務局

・東 延江 『渡辺宗子 弦 詩集成』他、
北海道内発行詩集、小熊賞受
賞者詩集、詩誌等多数

・高橋 絹代 詩誌「くれっしえんど」
一一二〜一一四号

・柴田 望 柴田望詩集『壁/盾/ドライ
ブ/海岸線』他

・清水恵美子 小檜山博『光る女』(著者サ
イン入り) 他

・武田 洋之 柿田美野里『キャンサーギフ
ト』(礼文島の写真、エッセ
イ)

・林 美脉子 林美脉子詩集『レゴリス/北
緯四十三度』

・冬木美智子 「PETANU」三十三号
郷土誌「豊談」、『南方熊楠全
集』他

・甲斐千枝子 歌誌「コスモス」約八十冊
・那須 敦志 『旭川青春グラフィティ ザ・
ゴールデンエイジ』

・前田 和恵 工藤威『浮かぶ部屋』、「野生

・鈴木 紘一 と知性」十三、十四号他
市内学校記念誌、アルバム等

・嵯城 妙子 嵯城妙子『令和元年 まきば
の四季』(詩と写真) 他
M・ジョン・ハリスン『ヴィ
リコニウム』他

・富岡 悦子 富岡悦子著『パウル・ツエラ
ンと石原吉郎』他

・ロータリー 商店会
「我等ときわ人 常盤物語」六
号

・寺澤 京子 『青芽反射鏡』一〜五号他
・坂本 剛志 藤田和日郎『からくりサーカ
ス』他

・北見 弟花 北見弟花句集『馬鹿の石』
・花崎 皋平 花崎皋平詩集『アイヌモシリ
の風に吹かれて』

・吉永 一江 『安部公房全集』(新潮社) 他
安部公房関係資料

・森下みかん 森下みかん『天国への列車』
『雪の上の足あと』

・森下 辰衛 森下辰衛『雪柳』

・鈴木 章 岩波書店「図書」各号他

・藤田 尚久 藤田旭山関係資料

・坂井 恒俊 藤田旭山関係資料

・佐藤 道雄 藤田旭山短冊他

・西勝 洋一 『亀井勝一郎全集』(講談社)、
中城ふみ子関係本、道内歌集

その他、各地文学館、記念館館報、各地市
民文芸、文芸同人誌、歌誌、俳誌、詩誌等た
くさんの寄贈を受けました。心よりお礼申し
上げます。

友の会人事動向 (敬称略)

【新入会員】

川原 潤、 今家 俊雄

※前号で新入会者のお名前が間違ってお
りましたので訂正いたします。

(誤) 岸 三千代 (正) 岸 美千代

【現在会員数】 (二月末現在)

一七五名 (うち法人六件)

編集後記

☆二〇一九年暮からのコロナ禍は幾度と
なく緊急事態やまん延防止宣言を繰り返
し、未だ尚収まらず、会いたい人にも思
うように会えぬ不自由な暮らしが続いて
います。

そのような中で今年度友の会にも悲し
い別れがありました。今号では六名の
方々を偲び、ゆかりのみなさんに思い出
を記していただきました。謹んでご冥福
をお祈りいたします。

☆編集期間中、北海道は大雪に見舞われ
大変な地域がありました。が、旭川は例
年の七割ほどの積雪で、申し訳ないよう
な、でもどうかこのまま春よ来たと願っ
てしまう私ですが…さて。 (ま)